自民の明暗 地元活動が左右

「地方議員と一体で戦う 重要」

2021 衆院選 振り返って

秋本氏（左）の応援演説に駆けつけた河野氏（真ん中）。大勢が集まり、河野氏自身の人気ぶりを見せつけていた＝10月８日、ＪＲ四街道駅前

今回の衆院選は、過去3回、自民党が勝ち続けてきた県内の11選挙区で、自民党は変わらず盤石な陣営と、接戦・劣勢に持ち込まれる陣営に分かれた。両者をわけたのは何か。

岸田政権が誕生した直後の10月8日。四街道市のJR四街道駅前では、党総裁選で敗れたばかりの河野太郎広報本部長がマイクを握っていた。

聴衆は600人以上。高校生ら若者の姿もあり、選挙カーの上に立つ河野氏には、写真に撮ろうと無数のスマホが向けられた。総裁選で河野氏を支えた地元9区の秋本真利氏は、報道陣に「ここまで集まったのは総裁選の効果だ」と語った。一方で、秋本氏は「（菅政権時の逆風は）そこまでよくなったとは感じない」とも話していた。

地方選でしこり

9区内では、この4年で県議選や佐倉市長選、千葉市議補選などで保守分裂選挙が相次ぎ、保守層にしこりを残していた。秋本氏の陣営への影響も大きく、ある自民党の地元議員は「初めて、（秋本氏のために必勝を祈願する）『ため書き』を出さなかった」と明かす。陣営関係者も選挙戦中、「保守系でも動かなかったり、熱心ではなかったりする地方議員は多い」と認めた。

秋本氏の地元での活動不足を指摘する声もあった。地元の自民議員は「大きな祭りやイベントの時にいるぐらいで、あとはほとんど姿を見なかった」と話す。

相手の立憲民主党の奥野総一郎氏は、今も国会近くの議員宿舎に住まず、朝は地元の駅頭に立ってから国会に通い、休日は自転車で地域を回っている。

朝日新聞が投開票日に行った出口調査では、自民支持層の2割、公明支持層の4割が奥野氏に流れ、無党派層も6割強が奥野氏を支持するなど、秋本氏を約4600票差でかわす要因になったとみられる。

魔の3回生 顕著

今回、安倍晋三総裁下での追い風選挙しか経験がなく、選挙基盤が強くないとされた「魔の3回生」は県内で3人いた。うち、秋本氏と門山宏哲氏（1区）は小選挙区で敗れ、いずれも比例復活となった。

対照的だったのは、もう1人の小林鷹之氏（2区）だ。初当選以降、地元に住み続け、毎朝のように、駅での活動をしてから国会まで通勤してきたという。

岸田内閣で閣僚に抜擢されたことで、各地の応援演説にかり出され、本人が地元での選挙活動に一日中専念できたのは、わずか数日だった。その間は、県議や首長、市議らが駅や街頭でマイクを握って、小林氏の録音テープを流すことで、支持を訴え続けてきたという。投開票日、午後8時で当選確実のテレビ報道が流れると、小林氏は「（2区になかなか戻れず）色々不安が湧き出たが、その不安を仲間が助けてくれて打ち消してくれた」と周囲に感謝した。

地元での活動不足が問われ、足並みが乱れた陣営はほかにもあった。二階俊博元幹事長の最側近の林幹雄氏（10区）。立憲陣営に2851票差まで詰められる苦戦だった。林氏が演説会で「この4年間、党務、政務とはいえ、地元に足を踏み入れることができず、大変不義理をいたしました」と謝罪する場面もあった。

今回の選挙について、自民党の浜田靖一県連会長は「（選挙前の）大逆風が、総裁選や新型コロナの感染状況の改善で、なんとか逆風くらいになった。そこから先は、選挙区次第だった」と分析する。

投開票から一夜明けた1日、県庁で会見した浜田氏は、接戦で勝敗を分けたポイントを問われ「地方議員と一体で戦うのが重要。連携が取れないとやはり厳しい」と語った。同席した河上茂幹事長も「地方議員とうまくいっているところが勝った。そうでない人が負けた」と言い切った。

（小木雄太）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。